

# 富岡漁港、大漁旗再び

# 8年4カ月ぶり再開 県内全10カ所復活

「先祖代々、双葉の海と共に生きてきた。この日お待ちわびていた」。富岡町の富岡漁港が26日、東日本大震災、東京電力福島第1原発事故から約8年4カ月ぶりに再開した。同町の漁師佐藤重利さん(73)は帰港の喜びをかみしめながら、愛船・宝祥丸に乗り古里の大海原へとこぎ出した。

佐藤さんは明治時代から続く漁師の家系で5代目。6代目の三男・義弘さん(42)と共に、震災前は富岡漁港や浪江町の請戸漁港を拠点に双葉郡沖で操業。刺し網漁を得意とし、ヒラメやカレイ、コウナゴ、シラウオなどを水揚げしていた。

7月27日 福島民友新聞(ほか)



▲再開を祝い、大漁旗をはためかせた漁船が富岡漁港を出港した=2019年7月26日午前10時11分、福島県富岡町、ドローンで福留庸友撮影  
▼法被姿で漁港に集まった関係者=2019年7月26日午前、福島県富岡町、福留庸友撮影(画像2点とも朝日新聞デジタル)



「海の餌が豊富で、いろいろな種類の魚が取れたんだ。もうけもあった」。そんな佐藤さんの日常は震災で一変した。津波で船は流され、原発事故で県外に避難を余儀なくされた。一時は心が折れかけたが「船乗りが天職」との誇りを胸に奮起。いわき市の久之浜漁港に新しい船を仮置きし、魚介類のモニタリング調査のための漁を続けてきた。

富岡漁港は、福島第1原発の半径10キロ圏内にある。事故前のように目の前に広がる海では漁ができないため、港から20キロ以上離れた沖合まで出漁する。漁港は復活したが、物流体制はまだ整っておらず、相馬市など別の漁港に水揚げしなければならない。義弘さんは「正直、負担は大きい」とこぼす。それでも「この海で取れた魚の味は世界一。食卓に届けたい」。古里に再び根を張り、親子二人三脚で町の漁業再生に挑む。

富岡漁港の再開により、県内の漁港10カ所全てが利用できるようになった。26日は、同漁港を拠点としていた漁船8隻のうち5隻が帰還。大漁旗を掲げて古里の海原をパレードし、町の漁業再生へ希望の船出を飾った。



## 歌津夏まつり Utatsu Summer Festival

8月4日はおなじみの「歌津夏まつり」  
名残の西表島パンを携えて、今年もエコツアー事務局の徳岡さんが南三陸町を訪ねてくれました。



ダンスや三線、カラオケ大会や「マドロス踊り」など、地元のみなさんが出演する企画がたくさんあり、夜には魚竜太鼓〜打ち上げ花火をたのしみに多くのお客さんが訪れていたそうです。

資料：福島民友新聞(ほか)、朝日新聞デジタル

we support ↓  
**RQ**  
災害教育  
センター

MONTHLY

「東北に黒糖を送ろう! 大作戦しんぶん」改め  
復興支援『すけさきたしんぶん』  
かゆいばん

「すけさきた」とは  
宮城県登米市あたるの言葉で  
「ボランティアに來たよ」という  
意味である

AUGUST  
**11**  
2019



同漁港は、カレイやコウナゴなど年間約48トンが水揚げされる町の漁業の拠点だったが、東日本大震災の津波で防波堤が壊れ、荷さばき所や事務所も流失。県などが2015(平成27)年度から復旧を進めてきた。

パレードでは色とりどりの大漁旗をたなびかせながら、船頭らが沖合でお神酒をささげ、豊漁を願った。相馬双葉漁協の立谷寛治組合長は「風評は根強いが、富岡漁港を含め一日も早い漁業の完全復興を目指す」と誓った。